はじめに――ヤマトで沖縄を生きた記憶

私は、一九三六年、沖縄出身の両親のもとに、東京で生まれた。そのひと月後に二・二六事件が起き、翌三七年には、日中戦争がはじまる。そして四一年一二月の米英への宣戦布告の翌年、国民学校(小学校)に入った。敗戦は、疎開先の熊本で迎え、その翌年、焼け野原の東京へ引き揚げてきた。その後東京都内を転々としながら、戦後復興の時代の中で成長してきた。だが、すでに五〇年六月、中学二年の時には、朝鮮戦争が勃発していた。

一九五二年四月、私は都立小山台(こやまだい)高校に入学した。それからひと月も経たない四月二八日、校長は、全校生徒教職員を校庭に集めて、「今日、めでたく日本は独立しました。万歳を三唱しましょう」といった。五二年四月二八日は、対日平和条約と、日米安保条約が発効した日である。その対日平和条約第三条によって、沖縄は、半永久的に、米軍政下に置かれ続けることになった。その日を祝って万歳三唱をするというのである。それから六〇年も経って、時の政府が、改めてこの日を「主権回復の日」として式典を行い、万歳をする馬鹿げた時代が来るなどということは思ってもみなかったのだが、いず

れにせよこの日は、東京生まれのウチナーンチュ(沖縄人)である私が、「沖縄」と出会うことになった衝撃の日である。私は、私と私の周りで万歳をする友人や先生方との間に存在する、もやもやとした、目に見えない壁を意識せざるをえなかった。多分、どこまで自覚していたかは別にして、私が、「沖縄」と出会い、沖縄を背負って、あるいは抱え込んで生きることになる出発点となった日である。

だが、沖縄を米軍支配下に放置した独立の日の衝撃は、否応なく、その起点となった沖縄戦の追体験へとつながらざるをえなかった。もし沖縄が戦場にもならず、日本(ヤマト)から三〇年近くも分離されることがなかったならば、多分私は、一人の東京人として、というよりも普通の人間として、親たちの故郷(ふるさと)である沖縄を何かの機会に遠く思い浮かべることはあっても、とくに沖縄に強烈な一体感を抱くこともなく、大都会の中で、別の人生を歩いたかもしれない。だが、私の高校生としての出発の時点が、日本の「主権回復の日」と合致せざるをえなかったという偶然は、私をして、自分の人生を「沖縄」を軸として、「沖縄」を生活の中心に置いて生きざるをえなくしたのである。

そして、私が大学に入学した一九五六年、沖縄では「島ぐるみ(の土地)闘争」が起こった。東京では、前年に引き続き、立川基地拡張のための強制測量と、これを阻止しようとするデモ隊が、激突していた。砂川闘争である。外へ目を転じれば、アラブ民族主義の台頭を受けて第二次中東戦争が起こり、ソ連圏では、ハンガリーの民衆蜂起があっ

た。沖縄も、日本も、そして世界も、揺れていた。視点を変えれば、民衆が歴史を動かそうとしていた。私は、そうした時代を実感し、そうした時代に青春を過ごしたことになる。

高校から大学へと、「沖縄」を強烈に意識しながら、時代的動向の影響を受けながら生きてきた私は、大学を卒業したら、沖縄社会の中で生きることを当然の将来像として描いていた。しかし、米軍支配下の沖縄は、私のような問題意識を持った人間を受け入れてはくれなかった。こうして私は、沖縄が米軍支配下に置かれている時期、ヤマトに生活の拠点を置きながら、沖縄と関わり続けて生きることになったのである。この本は、東京に生活の拠点を置きながら、「沖縄を生きた」時代の回顧録的な総括の記録である。

＊ヤマトとウチナー　沖縄語で日本、本土、内地と沖縄を区分する言葉として、ヤマト、あるいはヤマトゥと、ウチナーという言葉がある。人でいえば、ヤマトゥンチューとウチナーンチュ、言葉でいえば、ヤマトグチとウチナーグチである。時代によって使われ方に差があるが、最近、ある意味でのヤマトとウチナーの溝の深まりを反映して、使用頻度は増大してきているように思う。しかし、沖縄以外の読者にとって「ヤマト」という言葉でまずイメージするのは、大和朝廷や奈良近辺、あるいは戦艦ヤマトであることも多いと思われるので、あえて注を付けておこう。

目　次

はじめに――ヤマトで沖縄を生きた記憶……1
一　戦中・戦後の子ども時代……27
私のバックグラウンド／戦争の影／そして敗戦／焼け跡の子ども時代／私のウチナーグチ環境／中学生時代
二　沖縄との出会い――一九五〇年代の沖縄・日本・世界……69
高校入学と「四月二八日」／戦争とは何か／戦災校舎復興資金募集運動から生徒会活動へ／進路選択／浪人時代／大学入学／「島ぐるみ闘争」へのヤマトの反応とその背景／ハンガリー動乱そしてスエズ戦争／瀬長那覇市長の登場と追放／本郷キャンパスへ移る
三　戦後初めての沖縄訪問、そして六〇年安保……
「安保は重い」――ヤマトと沖縄の溝／沖縄へ行く準備／身分証明書を手に沖縄へ／USCARに呼び出される／沖縄から帰

って／六〇年安保闘争の後／中野好夫さんと出会う

四　沖縄資料センターと都庁勤務――二足の草鞋 ……95
福祉事務所のケースワーカーになる／沖縄資料センターの活動開始／沖縄問題研究会の周辺／転機に立つ祖国復帰運動

五　激動の時代へ ……113
一二回目の「屈辱の日」／新田暉夫というペンネーム／監査事務局への異動、稲毛への転居／『沖縄問題二十年』を書く／激動する世界と沖縄

六　排他的米軍事支配の破綻へ ……137
結婚／違憲訴訟と立法院議員選挙をめぐる動き／教育権返還構想と教公二法、そして裁判移送／教公二法阻止闘争／沖縄資料センターの活動

七　「日本戦後史」と「沖縄戦後史」 ……159
特集「敗戦二十二年――日本の政治と沖縄の現実」／『沖縄問題基本資料集』／転機としての六七年／この時期の沖縄論議と論者

八　激動の一九六八―六九年――三大選挙から二・四ゼネストへ……181
主席選挙をめぐって／『戦後資料　沖縄』と駿台荘／早大学生ティーチインと〝興南旋風〟／べ平連の現地闘争／沖闘委の渡航制限撤廃闘争／二・四ゼネストの挫折

九　七〇年安保から沖縄返還へ……207
一九六九年一月一八―一九日／第三の資料集『ドキュメント沖縄闘争』／佐藤訪米阻止闘争と国政参加／『沖縄・70年前後』／混沌の中で／うつの頃／赤松隊の陣中日記／沖縄返還へ／沖縄資料センターをどうするか

一〇　沖縄返還と大学統合問題……243
『沖縄の歩いた道』／沖縄大学の自主存続闘争／「支援する会」と存続闘争の方向転換／板垣雄三さんとの出会い／いざ沖縄へ／沖縄生活のはじまり

略年譜……271

あとがき……277

人名索引

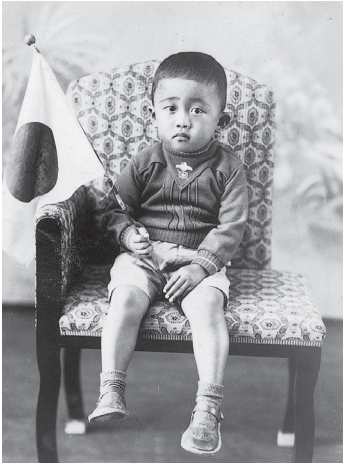
本書一〇八頁以降で論文の題名に付されている＊印は、その論文が『未完の沖縄闘争　沖縄同時代史別巻一九六二～一九七二』(凱風社、二〇〇五年)に収録されていることを示す。

一　戦中・戦後の子ども時代

私のバックグラウンド

私は、一九三六(昭和一一)年一月二七日、現在の東京都杉並区天沼(あまぬま)に生まれた。なぜ天沼かといえば、多分、天沼に母の叔母・久保仁千代(にいちよ)が住んでいたからである。前年三月に沖縄から上京し、父と結婚した母にとって、右も左もわからない東京で、叔母の近くに新居を構えることができたのは、何物にも代えがたい安心感をもたらしただろう。

父・盛忠(せいちゅう)は、祖父・盛茂(せいも)の二男として、一九〇四(明治三七)年、首里・崎山に生まれた琉球士族の末裔(まつえい)である。沖縄県立第一中学校を卒業後、二、三年代用教員をして旅費や学費をため、上京した。母によれば、父は、一中時代は特待生で学費免除で中学を卒業したのに、当時の首里は封建的なところだから、長男しか大学には行かせてもらえなかったのだ、という。確かに長男だけが別格の扱いだったという話は、叔父・叔母たちからも、ずいぶん聞いたような気がするが、父の兄弟姉妹は、八人もいたから、経済的



数え年３歳の著者．七五三の記念に那覇の写真館で撮影(1938 年 11 月 15 日)．

にも、子どもたちを中学や女学校にやるだけで精いっぱいであっただろう。祖父は、広島高等師範学校(現広島大学)を出て、県立一中の英語の教師をしていた。休み時間に泡盛をなめながら、授業をしていたというエピソードを多くの人から聞いた。

上京した父は、日本大学二部予科に籍を置き、専売局に勤めることになった。その頃の父は、文芸評論家的なものになりたいと思っていたらしい。私の書庫には、父の原書のバーナード・ショー全集が残されている。沖縄の旧都首里に、貧乏士族の子として生まれた父にとって、アイルランドの首都ダブリンに貧乏商人の子として生まれた劇作家で評論家であるショーは、強く惹かれるものを持っていたに違いない。だが、父にとって、生活と学業の両立は難しかったのだろう。結局大学は中退することになる。

父と同世代の沖縄出身者には、専売局に勤めていた人が少なくない。当時の沖縄出身

の官僚としては出世頭ともいうべき神山政良が、東京地方専売局長をしていたことも関連しているだろう。

母・タヲは、四人きょうだいの末っ子として、一九一一(明治四四)年、那覇市若狭で生まれた。父親の柳頂忠は徳之島の出身で、長く那覇の裁判所で書記をしていた。母親は、旧姓を禱當千代(久保仁千代の姉)といい、奄美大島の名瀬出身である。母は、県立第一高等女学校を経て沖縄県女子師範学校専攻科を終え、那覇の天妃小学校や中城の津波小学校で教員をした後、父と結婚するため上京している。

数え年8歳の著者と両親，弟．左端は吉田武夫少尉(1943年2月11日)

私自身は、天沼の記憶は全くないが、戦前の沖縄の断片的記憶はある。それは、私の二歳下の弟・盛宣を、母が里帰りして出産しているからである。父の実家には、フール(沖縄の伝統的な石造りの便所兼豚小屋)があって黒豚がいたこと、家の前の石畳の道を祖父・盛茂に連れられて散歩をしていたら突然地震に遭ったこと、

母の実家の廊下にぶら下がっていた鳥籠、近くの波の上公園で咲いていた竜舌蘭(りゅうぜつらん)の花、など。一九五九年、戦後初めて沖縄を訪れた時、首里・崎山の家の前の石畳の道は、幼い時の記憶のままであった。

私たち一家は、私が小学校(国民学校)に入学する前、葛飾区高砂(たかさご)に引っ越した。当時の高砂は、住宅地と境を接して水田が広がり、あちらこちらに溜め池が残る湿地帯で、湿地帯を埋め立てて宅地化が進みつつある時期だったように思う。京成電鉄の高砂駅の傍にも、線路沿いに大きな池があって、たくさんのハスが植わっていた。私たちの家も、埋め立て途中の溜め池を囲むようにして建てられた、六畳・四畳半・三畳に小さな台所と玄関が付いた規格住宅の一軒で、竹の垣根で区切られていた。数軒の規格住宅に隣接して、広い庭のある二階建ての大家さんの家があった。高砂に引っ越してきたのは、高砂の一駅隣の青砥(あおと)に母の兄・柳一夫の一家が住んでいたからだろう。日曜になると、頻繁に、母の教員時代の教え子だった陸軍士官学校生の吉田武夫少尉が訪ねてきていた。

隣には、専売局に勤める人の夫婦が住んでいたが、召集されて、中国へ送られ、中国からハガキをもらった記憶がある。慰問袋への礼状だったかもしれない。その人が召集されて間もなくその家に赤ん坊が生まれたことを覚えている。

太平洋戦争の開始(一九四一年一二月八日)前後の事は全く記憶にない。翌四二年四月に高砂国民学校に入学したはずだが、その辺の記憶もあいまいである。それはおそらく、

私が入学後どの段階かで長期休学し、留年して、一年生を二度やっていることと関係がありそうである。肺門リンパ腺炎という病名が、記憶の中に残っている。「お前は早生まれで同じ歳の子の大部分より一年早く学校に入っていたのだから……」と、親や学校の先生から説得されたことを覚えている。

私は、生まれつき虚弱体質だったらしく、歩き始めたのは、二歳の誕生日のころだったという。自分でも、小さいころから、体力的には人に劣っているという固定観念にとらわれていた。運動会などで走らされると、常にビリから二番目だった。不思議なことに、どこにも、私より遅い子が一人はいた。

戦争の影

国民学校の二年に進級するころ、つまり、一九四四年の春ごろになると、田園風景が残る東京郊外の高砂にも、B29が姿を見せるようになった。高射砲が鳴って、青空を飛ぶB29が煙に包まれたように見えるが、すぐに何事もなかったように煙の中から姿を現し、悠々と飛び去った。大人たちは、高射砲の弾は一万メートルの上空を飛ぶB29には届かないのだ、と話し合っていた。

空襲に備えて、防空壕を作ることになったのだが、最初の防空壕は、押し入れの壁際に父の『世界文学全集』や『漱石全集』を積み上げたものだった。それで爆風を防ぐつ

もりだったらしい。さすがにこれでは駄目だということになったらしく、父が、家の前の空地に防空壕を掘り始めた。掘り出した土で壁を作り、張り板を渡して屋根にし、その上にも土を積み上げた、古代の穴居住宅のような造りである。子どもでも背をかがめなければ入れないような小さな穴倉で、地面の上にすのこ板を敷いてあった。私たちは、いつも防空頭巾を持ち歩き、胸には、名前と血液型を書いた札が縫い付けられていた。

空地の向こうに少し年上の男の子がいて、その子がとっていた『少年倶楽部』を借りてよく読んでいた。楠木正成、新田義貞、元寇の役などのほかに、「勇敢な糸満漁夫」の話などが載っていた。直接戦争に関するものは記憶にない。カルタなどには、戦時色が反映していた。「渡る火の海ジョホール水道」などという文句を覚えている。ジョホール水道というのは、マレー半島とシンガポールの間の海峡である。フィリピンからインドネシアにかけての地域の地名は、ほとんどこの時期に覚えている。

やがて空襲が始まった。相模灘から侵入し、東京を爆撃した敵機の編隊が、九十九里浜へ抜ける帰り道に、余った爆弾を捨てていくのだといわれていたが、空襲の後には、あちこちにすり鉢状の穴ができていた。ある時、激しい爆撃の後、防空壕を這い出してみると、家の前の池に赤ん坊の死体が浮いていて、警防団のハッピを着た人たちが、鳶口でその死体を岸に引き寄せようとしていた。

四五年三月一〇日の東京大空襲のときは、空地の向こうの西の空が真っ赤になり、そ

の赤い空をバックに、行きつけの銭湯の黒いシルエットが浮かび上がっていたことを覚えている。そのころから、われわれも疎開をしなくちゃ、と浮き足立ち始めていた。実は、そのだいぶ前、多分那覇の一〇・一〇空襲の数カ月前だろう、母の両親が、沖縄から東京へ疎開してきていた。敵が沖縄に攻めてくるかもしれないので、年寄りはしばらく避難しておきなさい、と言われ、那覇市若狭の家は雨戸を釘付けにして、身の回り品を柳行李（やなぎごうり）に詰め、三線（さんしん）二丁と碁盤を二つ持って、やってきたのである。

当時、東京からの疎開先といえば、北関東や東北であった。父の知り合いもいたらしい。しかし、母の両親は、九州に行きたがった。その頃熊本・宮崎・大分などには、父や母の姉妹をはじめとする沖縄からの疎開者が大勢やってきていた。すべて女子どもである。成人男子は、早くから召集されていたり、沖縄で戦争に動員されていた。四五年四月、われわれ母子三人と、母の両親の計五人は、父を東京に残して九州へ向かった。途中岐阜県の大垣で空襲に遭い、かなり長い時間、闇の中で汽車に缶詰め状態になっていた。どれぐらいの時間がかかったのか、間違いなく一昼夜以上はかかって、福岡に着いた。

福岡では、祖母の弟・禱直（いのりなおし）のところにしばらく寄宿した。そこでは、空腹と配給所に並んでいたことぐらいしか記憶にない。通っていた学校の名前も覚えていない。しばらくして、熊本県葦北郡佐敷（さしき）町（現芦北町）に向かった。そこには、母の姉・兼本政（かねもとまさ）の家族

が沖縄から疎開をしてきており、院長が出征して休業中の病院に部屋を借りて住んでいた。われわれ三人は、しばらく旅館住まいをしてから、民家の物置のようなところに住んだ。雨が降ると雨漏りがし、畳の一部が腐っているようなところだった。やがて、大井軒という休業中の料亭の玄関の部屋と玄関わきの二間続きの部屋を借りることになった。母から父への手紙によれば、前のところの部屋代は一〇円、新しいところは二〇円だった。ずいぶん広く綺麗な所に来たという印象が残っている。祖父母は、寺の離れのようなところに居た。そこは、出征した息子さんの部屋だったとかで、本棚いっぱい少年向けの文学全集のようなものが残されていた。私は毎日そこに出かけてそれを読みふけっていた。山本有三の『心に太陽を持て』などはその時に読んだのだろう。

学校では、男子は木刀訓練、女子は竹やり訓練があった。「鬼畜米英」を打倒するためである。もう、沖縄戦は終わっていたのかもしれない。ときどき、グラマンと呼ばれた戦闘機がやってきて、機銃掃射をしていった。私自身が田んぼの畦道（あぜみち）を歩いていて、機銃掃射に遭った記憶もある。

母が、よく買い出しに出かけていた姿は印象に残っているが、芋中心の食べ物には、そんなに困らなかったように思う。私も前の河原を耕して小さな畑を作っていた。

そして敗戦

やがて敗戦。しかし、私たちがここで、天皇のいわゆる玉音放送を聞いた記憶はない。逆に、乗合馬車がのんびりと走っていた道の電柱に貼られていた「敗戦はデマだ」という貼り紙が印象に残っている。そのうち母たちが、どこかに集められて正式な告知を受けたらしく、帰ってきて「お前たちが仇を討たなければならない」と泣きじゃくっていたのを覚えている。九月一二日付の母から父への手紙には「アオイメの奴らがたくさんいる東京には帰りたくない」と書いてある。沖縄からの疎開者の中には、集団で、九州各地へ入植した人たちもいた。母の姉・兼本政母子も、沖縄には帰る先もなくなって、宮崎の都城（みやこのじょう）近くに入植したはずだ。

戦争が終わると、「鬼畜米英」の教育は、何の抵抗もなく「アメリカ民主主義礼讃」に変わった。これまで自動車の姿も見たことのなかった田舎道に、進駐軍のジープの車列が、砂煙をあげて走っていた。

ところで余談になるが、二〇一二年一月一二日の琉球新報の投書欄に二二歳の女子学生の「この歌を知りませんか」という投書が載った。

「アメリカの兵隊さん、ジープに乗って、走れば鳴るよ朝の鐘（風）。やあおはよう、ぼくらも元気で手を挙げよう（る）、ハーローグッドモーニング」

戦時中やんばるの山の中を逃げ回り、大宜味村大兼久（おおぎみおおがねく）の収容所に収容された当時六歳のおばさんが、収容所の幼稚園で教わった歌だという。この歌こそ、敗戦直後に佐敷国

民学校で、私たちが教えられた歌である(カッコ内は私の記憶が違うところ)。投書者は次のように書いている。

「私は、収容所でこの歌を聞いた人々は何を思ったのかと考えました。まだ幼稚園生だったおばたちはただ無邪気に歌っていたのかもしれませんが、日本軍の勝利を信じ戦ってきた人々にとってこの歌はどう響いたでしょう。」

私にとってそれは、学校不信、教師不信の起点になったような気がする。投書者が集めた情報によると、熊本の疎開先で聞いたという人が私以外にもいたほか、渡嘉敷(とかしき)村で歌っていた人もいたという。インターネットで検索したら、東京でこれと似た歌を聞いたという人がいるという。とすると、この歌は、占領軍が、文化教育政策の一環として、あらかじめ準備し、持ち込んだ可能性もある。九州・沖縄間の交通通信が完全に途絶していた時期に、両地域の学校や幼稚園で、まったく同じ歌が教えられることなどありそうにないからである。

付け加えておくと、教師不信といっても、必ずしも教師個人に対して不信感を持ったという意味ではない。当時の私たちの担任は、おそらく一〇代の、女学校を出たばかりの女性だった。学校教育には不信感を持ちながらも、時代の変わり目で、生徒たちにもみくちゃにされるその女性教師個人には同情や親しみを感じていた。東京に帰ってからも、ずっと年賀状のやり取りが続いていた。それから二〇年以上も経って、その人の娘